20

鄙のまれびと
hina no marebito

不朽の櫛・簪を普及

櫛かんざし美術館館長
澤乃井ままごと屋専務
小澤徳郎氏（おざわとくろう）(63)

時代劇ぐらいでしかなかなか目にすることのない女性の櫛や簪（くしかんざし）だが、青梅市の「澤乃井 櫛かんざし美術館」に行くと、多数の展示がある。「江戸時代の装飾品で男性から女性への贈り物といったら櫛や簪ぐらいでした。今のダイヤモンドほどの価値です」と述べるのは平成10年開館時に副館長、15年から館長を務める小澤徳郎氏。父親で銘酒「澤乃井」の小澤酒造21代当主、小澤恒夫氏が芝木好子著『光琳の櫛』のモデルでもある岡崎智予さん所有の櫛・簪3000点を購入したことで徳郎氏の仕事の幅が広がった。

「親父はなかなかの数寄者（すきしゃ）で知人の紹介から岡崎さんを知り、そのコレクションに一目惚れしました。岡崎さんは愛着のある品々の散逸を嫌い3000点をそのまま大事にしてくれる人を探していたのです」。

その昔、澤乃井は恒夫氏の「日本人の食生活が味や油が濃い欧米化へ進む」との先見性から清酒の辛口一本化へ舵を切り奏功。直営料理店「ままごと屋」も大繁盛。日本画壇の巨匠・川合玉堂の玉堂美術館とともに、観光蔵としての地位を確かなものにしていく。

小澤酒造は23代続く東京では最古の酒蔵だ。家訓は特にないが、「酒造りは神事なので1日の始まりは神棚の前で二礼二拍手一礼から始まります。親父や爺さんからは『人に笑われるようなことはするな。家が笑われるだけでなく地域が笑われる』とよく説教されました」。いかにも旧家らしい戒めが徳郎氏を育んだ。大学卒業後は家業を手伝い、専務としてままごと屋を任されていた。そんな時、櫛かんざし美術館開館の話が持ち上がった。酒造りは兄の順一郎氏が経営手腕をいかんなく発揮。徳郎氏は師事する岡崎さんと顧問を委嘱した橋本澄子さん（元東京国立博物館染織室室長）から櫛・簪などの歴史を学んだ。

徳郎氏はさらなる塊集を繰り返し、所蔵も現在5000点。「なかでも尾形光琳作『鷺紋様蒔絵櫛』に勝るものはないでしょう。重要文化財クラスの逸品だと思います。加えて作者不詳『桜花紋様蒔絵櫛』です。形が丸く大胆で図案化したデザインなので、この美術館の看板として採用しています」。最後に「この街道には『青梅きもの博物館』、『吉川英治記念館』（休館中）、当館、『玉堂美術館』が並んでいます。人呼んで『ミュージアムロード』。できればこのロケーションを充実させていきたい。もちろん櫛・簪の魅力をアピール・普及し、当館の年間来場者数を往事の5万5000人に戻すのが先決です」と意気込みを語った。

文　山ノ堀正道　写真　岡村繁雄